新聞配達夫の恋

早朝に会う彼女に僕が恋をしたのは、僕がこのアルバイトを始めてすぐのことだった。葡萄色の美しい瞳、深紫色の柔らかい髪、新聞を受け取る白い手。そして

「おはようございます、いつもご苦労さま」

と挨拶をしてくれる甘やかな声。今から思えば一目惚れだったのかもしれない。兎に角、僕は生まれて初めて本気で恋をしたのだ。

「おっ！映画のチケットじゃないか。気が利くねぇ。これであたしと天地がデートできるってもんだ」

居間の机の上にあるチケットを指でつまんで、魎呼が嬉々として声を弾ませた。

「駄目よ、魎呼お姉ちゃん。それ、お姉様のなんだから」

砂沙美がやんわりと窘める。

「阿重霞の？何だよ、あいつ。一人だけ抜け駆けかよ」

「違いますよ、魎呼さん。阿重霞さん、デートに誘われたんですよ」

お茶を淹れながら美星が説明すると、魎呼は一瞬キョトンとした。だがすぐに腹を抱えて大笑いし出した。

「あー腹痛てぇ。ひひ、阿重霞がデートぉ？あーこりゃあいい。あはははは」

「笑いすぎだよ。お姉ちゃん」

「だって、これ以上の傑作は無いだろう」

ひとしきり笑うと、魎呼は美星に淹れてもらった茶を啜って一息ついた。

「で、阿重霞を誘うようなトンチキは誰なんだ？親父の友達とかか？あいつ、親父受け良いもんな」

「それがね、新聞配達のお兄さんなの」

ブッと魎呼が茶を吹き出した。

「汚いよ、魎呼お姉ちゃん」

「だって、選りにも選って新聞配達のバイトの兄ちゃんかよ。あーこりゃ最高だね」

「毎朝阿重霞さんにお会いして惹かれたんですよ、きっと。阿重霞さんお優しいですもの」

煎餅を食べながら美星は自分の言葉に頷いた。

「お優しいねぇ…。で、映画か。これ、職権乱用ってヤツじゃないのか？」

「シッケンランヨーって何？」

「職権乱用って言うのはね、自分のお仕事の権利を、その権限を越えて悪用しちゃうってことよ」

「ふーん…でも、そんな事ないんじゃない？新聞配達のお兄さん、砂沙美も会った事あるけど、自分で稼いだお金でチケット買ってそうだよ」

「そうよね。だってまだ若いのに早朝の新聞配達なんて大変なお仕事を選ぶのですからね」

美星は神妙な面持ちで砂沙美の言葉に頷いた。
「まぁ、何せよ見ものだな」
バリッという、軀呼が煎餅を齧る音が居間にひと際大きく響いた。

阿重霞は気に入らなかった。どうしても気に入らなかった。自分が他の青年に誘われたというのに、天地は全く驚かなかったからだ。それどころか
「楽しい日になると良いですね」
と、天地は笑った。
（天地様は私に全く関心が無いのかしら）
阿重霞は苛立ちを感じた。
（仮にも、ひとつ屋根の下にこんなに長く一緒に住んでいるというのに、天地様は私に何もしない。それどころか何も仰らない。私の事、女として見ていないのかしら。それとも、私は魅力が無いのかしら。天地様にとってそれだけの存在って事？それではまるで空気じゃないの！そんなの厭だわ）
午前中の畑仕事を終えた天地は、阿重霞の隣りで、阿重霞の持って来た砂沙美特製弁当を美味しそうに口に運んでいる。阿重霞はチラリとその横顔を見た。
（呑気な顔をして…）
これでは自分一人がカリカリして莫迦みたいだと阿重霞は思った。
「天地様、あれですわね」
「ハイ？」
平和そのものの顔で弁当をパクついている天地が憎らしくなって、阿重霞は静かに切り出した。
「映画というものは、二時間くらいですわよね」
「ええ…。大体そうじゃないかな。俺、映画なんてもう何年も行ってませんけど」
「二時間くらいというと、お昼頃に行けばお夕飯になりますわね」
「…そうですね」
「夕方ってことは、お夕飯になるますわよね」
「…はぁ」
「お夕飯ってことは…」
言いかけて阿重霞は止めた。天地が呆けた顔で阿重霞を見ている。天地は阿重霞が何を言いたいのか、皆目見当もつかないらしい。
「もういいです！」
阿重霞はすっくと立ち上がり、天地に背を向けた。
「阿重霞さん？」
「もう、知りません」
箸を持ったまま、ぼんやりとしている天地を一人畑に残し、阿重霞は歩き出した。

（私がどうなろうと天地様には本当に関係ないんだわ！）
そう思うと、悔しいような切ないような想いが込み上げて来て、阿重霞は指でそっと、目の縁の涙を拭った。

映画はアクション映画だったが、阿重霞にとっては特別面白くもつまらなくもなかった。ただ激しいアクションシーンに阿重霞は些か疲れた。
「少し、何処かでお茶でも飲んで休んで行きますか？」
樋口という少年は、まだ顔はあどけなかったが、心配りのできる、爽やかな人物だった。
（天地様と同じ歳くらいかと思ったら、天地様よりも若いだなんて…）
阿重霞は、まだ高校にも上がっていないこの少年が、家族のために早朝の新聞配達というアルバイトに就いている事が不憫に思えて来た。天地よりも…と、自分でも無意識のうちに、この少年と天地を比べている事に嫌気がさし、阿重霞は頭を振った。
「どうかしました？」
「い…いえ、何でも」
「そうですか…。あの、彼処の店で良いですか？」
はいと返事をしながらも、阿重霞はやはりこの少年はまだ子どもだと思った。樋口少年は、阿重霞を見慣れない店に連れて行った。ファーストフード店というのだと、以前テレビで見た事がある。
二人は窓際の席に向かい合って座ると、シェイクと呼ばれる甘い飲み物を飲んだ。
「ずいぶんと甘いですわね」
「え、シェイク初めてですか？」
「ええ」
「もしかして、こういう所も初めてですか？」
阿重霞がコクンと頷くと、樋口少年は大袈裟なほど驚き、何故か目を輝かせた。
「本当に、僕のイメージ通りの人だ」
「イメージ通り？」
「はい！清楚で可憐で綺麗で…本当に…僕、僕…」
樋口少年は膝の上でぎゅっと拳を握り、耳まで真っ赤になりながら一生懸命言葉を探している。そして、いざ
「僕、あなたのことが好き…」
「私って、そんな風に見えます？」
告白をしようという時、阿重霞が少年の言葉をかき消した。
「はい…？」
少年は最早、泣きそうだ。チャンスはあと何度あるだろうかと考えられる程の余裕も彼には無かった。
「そんなに魅力的に見えるかしら。綺麗に…。だとすると、何故あの方は気付いてくれな

いの？」
「あの方…？」
樋口少年は首を傾げて阿重霞に訊き返した。
「私…私、好きな殿方が居ますの」
その瞬間、少年の頭は大きなハンマーで殴られたかの様にぐわんと揺れ、心には鋭い剣が突き刺さった。阿重霞はそんな少年の気持ちなど察することなく、言葉を続けた。
「その方は、お優しい方です。とても誠実な方。でも、少し…いいえ、かなり鈍感な方で、私がいくらお慕い申しても分かって下さらないのですわ。でも、最近考えたのです。本当は私に魅力が無いだけじゃないかしらと。こんな事、貴方に言っても仕方ない事ですけれど、私だって、少しは魅力というものがあるはずですわ。そうでしょう？貴方だって、今、私を魅力的だと仰って下さいましたわよね？あの方にはそれが通じない…。通じないのではなくて、他に好きな方が居るのかもと考えてみましたけれど、そうでもないですし…。ねぇ、こういう場合、どうしたら良いのです？地球の殿方はどのようなふうにすれば分かって下さいますの？」
途中から自分が何を言っているのか阿重霞は訳が分からなくなった。溢れて来る自分の感情を抑えられず、阿重霞は次々と言葉を発しては、何も罪のない少年に詰め寄った。
「…ごめんなさい。貴方に話しても仕方ない事だのに…」
天地の笑顔が脳裏によぎる。優しい、温かいその笑顔。ふと阿重霞の瞳から涙が一粒零れた。
「ごめんなさいね、本当に」
阿重霞は謝ると、席を立つと樋口少年に一礼した。少年の目はうす暗く、此処ではない何処かを見ていた。だが、殆ど意識の無い状態で少年は呟いた。
「良いんです…あなたは素敵ですから…」
阿重霞は無理矢理微笑むと席を後にした。

帰りのバスに揺られながら、阿重霞は考えた。
（天地様にとって、私はきっと何でも無い存在なのだわ。魅力も、女らしさも感じない存在。天地様にとって大切な者ではないんだわ）
そう思うと、また涙が溢れそうになったが、阿重霞はぐっと堪えた。皇女たる自分がこんな場所で泣くのはあまりにも惨めだと思ったからである。夜の帳が下りた街が窓越しにキラキラと揺らめいていた。

バス停に到着すると、天地が待っていた。
「おかえりなさい、阿重霞さん」
柔らかく微笑む天地に、阿重霞は思わず抱きついた。
「ど、どうしたんですか、阿重霞さん。御気分でも悪いんですか？」

急に抱きつかれた天地はあわあわと焦り、阿重霞の顔を覗き込んだ。その顔はいかにも困惑していたので、思わず阿重霞は笑った。
「ふふ、天地様困ってらっしゃる」
「…？」
「天地様、何故、お迎えに来て下さったのですか？」
肩越しに天地の体温を感じながら阿重霞は呟いた。二人きりでいられる幸せ。
「え、だって、夕方になってしまったし…阿重霞さん、バス乗り慣れていないから…」
「では、何故、行くなと仰らなかったの？」
阿重霞はぎゅっと天地に回した手に力を込めた。
「…映画なんて見に行く機会なんてそうそうないでしょう。それに…」
「それに…？」
「阿重霞さん、もっと日本の事を知りたいって以前、言っていたから…。俺が連れて行ってあげたら良いですけど、ほら、そうすると魎呼達が何かと煩いですし…」
阿重霞は天地から体を離した。
「天地様、私が他の人と一緒でも宜しいんですか」
「…」
真っ直ぐに天地の目を見つめると、天地も真っ直ぐに阿重霞を見つめて来た。
「もし、その人と…」
「でも、阿重霞さん、帰って来るでしょう。阿重霞さんは此処に居るんですから…」
その瞬間、阿重霞の中でモヤモヤと固まっていたものがすぅっと消えて行った。
（天地様は、私の事を意識していなかった訳ではなく、信頼して下さっていたんだわ）
天地はまだ不思議そうに阿重霞を見つめている。
「俺、何か変な事言いました？」
「ふふふ、いいえ。天地様は何も変な事など仰っていませんわ。さあ、帰りましょう。慣れない街を歩いて、草臥れました。天地様、手を繋いで下さいまし」
すっと差し出された阿重霞の手を天地はぎこちなく取った。
「魎呼に見つかったら、あいつ怒りますよ」
「あら、天地様、恐いんですの？」
「…いいえ、そうじゃないけど…」
夜風がすっと阿重霞の頬を撫でた。魅力的だと天地が自分に言ってくれることは一生無いかもしれないが、それでもいいと感じた。天地がしっかりと待っていてくれるならそれで構わないと。

その後、新聞配達の樋口少年は、アルバイトを変えたのか、地域担当が変わったのか、柾木家には現れなくなった。その代り、新聞配達夫の中年男性が早朝の配達をするようになった。

「おはよ、ご苦労さん」
だが、髪を逆立てた魎呼がニッコリ笑って新聞を受け取るので、恐怖に慄き、ひえーと叫ぶと、翌日から来なくなった。
「何だよ、あたしみたいな魅力的な女を朝から拝めるチャンスなんてないのに。変な奴」
魎呼はムッとしていたが、それから暫くの間、柾木家は新聞を取るのを止めたのだった。